



徳川家康が愛した白羽^{こうじ}柑子を白羽地区に復活させる 新神子区まちづくり委員会



初めての秋に5個が実る

新神子区まちづくり委員会は4月14日、徳川家康が愛したとされる「白羽柑子^{こうじ}」の成木^{せいぼく}を、同区が整備を進めている植物園に川根本町から移植した。初めての秋を迎えた成木には5個の果実が実った。

柑子はミカン科に属する柑橘類の一種で、「薄皮ミカン」ともいわれる。もともと白羽村に生えており、白羽産の柑子は江戸時代の書物に掲載されるほど有名な代物だった。それ故、県内でも移植により各地で栽培されていたが、明治時代からは、甘みが強い温州ミカンが主流となり、次第に姿を消していった。ついには白羽地区でも栽培されなくなってしまうたという。

白羽柑子と徳川家康

御前崎町史には「武田の軍兵に追い詰められた徳川家康は、敗走するさなかに白羽区の旧家安西一興家の庭に植えられていた大きな白羽柑子の木に隠れたことで難を逃れることができた。この時、喉の渴きを癒やすためにひそかに

食べた柑子の味が忘れられず、後年大御所となって駿府に落ち着いたとき、白羽神社の神主を通じて安西家の柑子を所望した。安西家ではこれを大変光栄に思い品質を選びすぐって、神主滝宮内を通じて献上したことから、神主が幕府に年賀を述べる際に献上するのが例になった」と記されている。

子どもたちが誇れるまちに

まちづくり委員会の手によって復活した「白羽柑子」。この事業の発起人である曾根竹男さんは、「このまちを盛り上げるために、ここにしかないものを発信したいと考えた。その時に思いついたのが徳川家康が愛したとされる白羽柑子でした」と話す。続けて「私たちの仕事は、先人から受け継いできた歴史や文化を後世に紡いでいくこと。今後も地域の子どもたちの郷土愛を増幅させる心おこし活動を続けていきたいです」と意気込んだ。

同委員会は、これからも地域の発展を願い活動を続けていく。